松本清張全集26

松本清張全集 26

文藝春秋

松本清張全集26　小説日本芸譚・火の縄・他

定価　1400円

1973年3月20日第1刷　1978年4月15日第4刷

著　者　© 松本清張

発行者　樫原雅春

発行所　株式会社 文藝春秋

〒102　東京都千代田区紀尾井町3

電話(代表)03—265・1211

印刷所　凸版印刷株式会社

落丁乱丁はお取替します

小説日本芸譚　3
火の縄　121
私説・日本合戦譚　283
解説　池島信平　501

装 幀 伊 藤 憲 治

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

小説日本芸譚

運慶　5
世阿弥　18
千利休　31
雪舟　43
古田織部　54
岩佐又兵衛　66
小堀遠州　76
光悦　86
写楽　99
止利仏師　110
後記　119

運慶

1

仏師法印運慶は、京都の七条仏所の奥で七十六歳の病んだ身体を横たえていた。貞応二年の春の午さがりである。昼餉には、温糟に蘘荷、酸蕗、鶏冠苔の点心が出たが、わずかに梅干に箸をつけただけであった。食欲がまるでない。潮の干満のように睡気が繰り返してさして来るだけである。

工房の方からは絶えず木を挽く音や削る音が聴えてくる。それにまじって人声がする。一番高いのは息子の定慶の声である。そういう雑音が衰えた耳に一種の懈い調和音となって、眠い意識を心地よく揺った。

うとうとしかけていると、息子の康弁が足音を忍ばすようにして入ってきた。

「お目ざめですか？」

と彼は枕もとに寄った。

「蓮華王院の宜瑜さんが、見舞にお見えです。お通ししますか？」

その小声に運慶はうなずいた。宜瑜なら不快な相手ではない。睡気が去りかけると、人の話が欲しい気がした。運慶は衾の中で身体を動かした。

宜瑜が入ってきた。遠慮深そうに褥の脇に坐ると、長い眉毛の下の目を細めて、

「御気分は如何ですか？　お顔色はだいぶよいようですな」

と上からさし覗くようにして云った。

運慶は、宜瑜の雀斑の浮いている皺の多い顔を見上げて、礼を述べた。陽は座敷まで明るい。今日のようなお天気は、外を歩けば気持がよいだろう。その陽ざしの中を健康な足どりで歩いてきた宜瑜が、運慶には多少羨しくないことはなかった。

宜瑜は世間話をはじめた。彼はこの三日に行われた闘鶏の模様を話した。その話し振りが面白いので、運慶は釣り込まれてきいた。その間にも工房からの木を削る音と人声は絶えず聴えた。

宜瑜は闘鶏の話が一段落すると、その工房の音に耳を傾けるようにして、

「いつもお旺んで結構ですな」

といった。それからつづけて、

「これだけ盛大になれば、あなたも本望でしょう」と述べた。

宜瑜は、運慶がここまで仕上げてきた七条仏所派の成功

を賀しているのである。運慶の父康慶までは、いや、彼自身が中年過ぎまでは、彼らは奈良仏師という名で京都三条仏所派からは地方作家として一段低く見られていた。それが鎌倉幕府の援助の下に運慶が一門を率いて活動し、遂に主流となって三条派を衰微させ、この京の七条に仏所を構えてからは、完全に相手を蹴落したのであった。今では造仏を依頼する者は、この近畿はもとより、関東、奥羽まで及んでいる。七条仏所といえば、名実ともに最高の権威となった。それは運慶が永い間に亙って目標を立ててきたことなのだ。宜瑜の云った、あなたも本望でしょう、という短い言葉にはこれだけの意味が含まれてあった。

運慶は、それにはあまり気の乗った返事をしなかった。今は、そんな話題には触れたくなかった。無論、宜瑜の賞讃には、それを肯定する満足感が底に横たわっていないではなかったが、仕事の話に調子を合せる気分はどうしても起らなかった。どこかでそれを忌むものが膜のように張っていた。

それは宜瑜が芸術を解さないからではない。現に彼の居る蓮華王院本堂には、運慶が年少の頃に彫った千手観音立像が残っていた。宜瑜はそれを珍重し、自慢にしている。彼もまた今まで運慶を支持してきた数多い中の一人であった。が、それだけに、今は仕事の話を避けたかった。妙に心が鎖していた。宜瑜が不用意に吐いた、あなたも本望でしょう、という一語が運慶の心に或る素直さを失わせたのである。

宜瑜は運慶の顔色の浮かぬのを見て、別な話をはじめた。彼はこの三月の上巳の日に、或る貴族の曲水に招じられた。その宴で公卿たちの歌の披講を聴いたが、当節の公卿どもの歌は末節の技巧に走ってまるでなっていないと批評した。それから一つ一つ辛辣な短評を試みた。

それは面白かったから、運慶は衾から身体をのり出すようにして聞いた。すると宜瑜はそのあとで、

「なかなか上手が居なくなりましたな。仏師もあなたのような人は後世に容易に顕れまい」

と云った。話題の雲行がまた怪しくなったので、せっかく開きかけた運慶の心は警戒をはじめた。が、今度は相手は彼の心に気付かなかった。

「安阿弥どのも相変らず立派な仕事をなさいますな。あの人は次々と宋の新しい様式を取り入れて、すっかり身につきましたな」

運慶はうなずいた。話題は彼の最も欲しくないところにきた。しかしこれは明らかに不快な表情を露骨に見せてはならぬことであった。運慶は衾のなかで身体の位置を動かした。

宜瑜は、安阿弥の、つまり快慶の賞讃をはじめた。それはありきたりの感想で、運慶には一向に耳新しくない飽いた言葉であった。が、遮ることは出来ない。彼は顔で相槌をうちながら、心は次第に乾いてきた。

もし、このとき長子の湛慶が註文をうけた造仏のことで相談に来なかったら、運慶は宜瑜の話を際限なく辛抱せねばならなかったに違いない。が、湛慶がそこに入ってきたので、宜瑜のながしりはようやく浮いた。彼は目下土佐に流謫中の土御門上皇を幕府が近く阿波に遷し参らせるらしいという消息を最後に聞かせて腰をあげた。

2

宜瑜が帰ったあとでも、運慶の気持は容易に和まなかった。一旦、投げ込まれた泥はひろがって濁った。悪いことに、他人のきかせた言葉を反芻して、あとで棘の傷を深くするのが彼の癖であった。

あなたも本望であろう、といわれたことも一つである。宜瑜は彼の芸術について云ったのではなく、それとは別なことである。彼の造仏技術が京都仏所を圧倒したという意味にうけとるには、あまり単純過ぎるし、たしかに他の内容を感じた。それは芸術に関係のないことである。のみならず、背馳の精神と想われるものだった。これまでしばしば云われている運慶の統率力と政治性、つまり悪口で表現される「商売根性」をその言葉は含んでいた。無論、これは運慶の独り相撲の受け取り方であった。しかし宜瑜の何気なしに吐いた一言に、無意識にその内容が無かったとはいえない。それは彼がこれまで受けてきたどの批評よりも、一番彼の心を真黒に塗り、彼を反抗させた指摘であった。

それから宜瑜が、快慶の名を持ち出したことも心を乱した。快慶の評価については彼は変らぬ計算をもっている。しかるに世間の評価は近頃だんだん甘くなってきていた。運慶から見ると、愕くほど過大なのである。以前には快慶の芸術に冷たかった者も、ひどく寛大になり、いろいろと賞めるようになった。この変化が運慶に気に喰わない。要するに快慶の新しがりの工夫に、何か神秘な附加物を錯覚したとしか思えない。が、快慶と己との関係を考えると、運慶は世間のずれた見識に正面から反対することは出来なかった。その不当な忍従が、彼をいつも苛立たせるのである。

「ふん、宋の新様式か」

運慶は嘲るように呟いて衾のなかで寝返りを打った。

外は雲も流れないのか、陽は翳りもなく相変らずこの座敷に明るい。木の音と定慶の高い調子のまじる人声とは依然として聴える。運慶はもう一度、この懈い雑音の中に睡ろうと思った。

が、一度、妨げられた平静は容易に心に帰って来なかった。眠りたくも、睡気はどこかに去ったままであった。運慶はまた寝返りをして萎んだ瞼を塞いだ。思考の方は冴えるばかりである。運慶は諦めて、考えの湧くままを追うことにした。そのうち眠りに誘い込まれるかもしれないと思った。

一体、おれが快慶を意識したのは、いつ頃からであろう。

――と運慶は考えはじめた。

――運慶の父の康慶は、東大寺の附属の仏師であった。父だけではない、祖父の康朝も、その父の康助も、その前の頼助も、悉くそうであった。それを辿ってゆくと定朝になるのだ。奈良に住んでいたから、世間では奈良仏師といった。

父の康慶は、その名前で云われると嫌な顔をした。中央の仕事をしている京都仏師からくらべて、所詮は田舎仏師だという軽蔑の響きがあった。父はそれを弾ね返そうとした。弾ね返す――それは造仏の技術でゆくより仕方がない。京都仏師に無いもの、異なったものを康慶は造り出そうとした。その血を運慶は完全に享けたと思っている。

彼は親父について童のときから彫技を習った。鑿の使い方を覚え、八寸角の樟の材が荒取りから次第に仏像に移りゆく歓びを知った。康慶はたいてい眼を光らせて彼の手先を見詰めたが、時には何とも云えぬ表情がその眼に映っているのに、ぶっつかることがあった。実際、康慶は他人には、彼に望みをかけていると語ったものらしい。そのころ快慶が居たかどうかさだかな記憶が運慶にない。何しろ弟子は多勢いたし、技術はほとんどみんな同じ位であった。そうだ、あの頃は快慶は彼の意識になかった。

父の康慶は何かを創り出そうとしたが、まだ発見には到着していなかったと運慶は思う。その証拠に彼が十七、八のころに父の指図で造った蓮華王院の千手観音は在来のものと型が殆ど同じである。定朝が造り出した様式から脱けてはいなかった。どんな才能ある人間でも、時代の様式の固定観念の中に、暫くは蹈まねばならないのだ。

康慶の仏所は奈良に在った。仕事は東大寺や興福寺の造仏や修理であった。東大寺には天平の仏像が数知れず安置してある。その修理に従うことで、康慶たちは天平の古仏に毎日親しんできた。だが、それに憧憬し、その容を取り入れようと彼が思い立ったという考え方は妥当のようだが、時間的な飛躍がある。時代の様式の呪縛は、そこまですぐに解放はしない。

それに造仏は仏師たちが勝手にやるのではもとよりない。註文をうけてからかかる職人仕事なのだ。願主という註文主の意に叶わなければ一体の仕事もない。それから註文主の方が時代の様式に何よりも忠実であった！

この様式の規律と、四百年以上の時間的な距離の観念に妨げられて、康慶たちは天平仏に親しんでも、まだ密着がなかった。驚嘆はあっても、それが彼らの技術や仕事に密着しない限り、ただの観賞者に過ぎない。彼らの眺める眼は、まだ遠いものであった。

運慶は二十五、六のころに、円成寺の大日如来像を造った。父の指導で、ほぼ一年がかりで仕上げた。この出来は大そう見事だったので康慶も賞め、願主もよろこんだ。だ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

が、これも時代の様式に従ったというに過ぎない。

あの頃は、快慶もさほど目立たなかった。何しろ、みんな同じようなものを造っていたからな。――運慶は眼を閉じながら、そんなことを思いつづけた。

3

だが、一つの情景が運慶の記憶にある。そこだけは、陽が射し洩れたように明るい。

運慶は父の康慶と一緒に高野山に詣でた。いつだったか忘れたが、何でも早春の日であった。諸堂の諸仏を拝して廻るうちに遍照院の一隅に忘れたように置かれた仏像があった。暗い場所だったから、それを大日如来像と判じるまでには、いくらかの時間を要したくらいだ。運慶は案内の僧から燭をかりてそれを仔細に見た。それは他の仏像とは違っていた。何か粗い感じのする作風であった。

「これは、おれの親父、つまりお前の祖父の康朝が作ったのだ。当時は願主に気に入らなかったのだな。造りが大そう荒いという叱言を喰ったのだ。だから今にこんな隅に影のように置いてある」

康慶は運慶の耳にそうささやいた。

運慶はそのときの印象を忘れていない。なるほどその彫刻の仕上げは荒い。しかし何か異なった生命のようなものが籠っていた。生命――様式の巧緻から落第したその疎荒にである。妙な生々しさが動いていた。

外に出ると早春の風はまだ冷たかった。が、頬はほてっていた。今みてきた大日如来像が眼から離れない。東大寺諸堂に安置された天平の諸仏が、急に時間を縮めて彼に逼ってきたのは、この瞬間からである。彼の心に四百数十年の時間の壁を叩き壊す槌の役目をしたのはわずか二十年前という康朝の作品であった。

天平仏と運慶との距離は、そうなれば、時代の距りではなく、空間だけとなった。いま空気を吸っている現在の様式から脱れても、次の表現は宙に迷う。その落着く次元を発見して、運慶は眼が開いたと思った。彼は、はじめてこの早春の陽ざしのように明るそうな眼付きをした。

然し、次の運慶の記憶はもっと鮮烈なものであった。それは炎の記憶なのだ。

夜空をいっぱいに火が焦がしていた。火は冬の烈風に煽られて狂い舞っているが、風はもっと凄惨なものを耳に運んだ。何千という人間の叫喚だった。治承四年の極月、頭中将重衡が四万余騎で南都を焼いたときのことであった。

運慶は春日山内に避難してこの光景を眺めていた。ここから見ると奈良は炎の海である。興福寺の東金堂の屋根が焼ける。西金堂も火がついている。五重塔と三重塔は火柱となって焼け落ちた。すぐ眼の下にある東大寺の大仏殿は炎上の旺りで、逃げかえってきた者が話しているのをきくと、大仏殿の二階の上には二千人あまりが焼死しているという。金銅十六丈の盧遮那仏は御頭がすでに地に落ちたと

語った。講堂、食堂、廻廊、中門、南大門はすでに跡かたもなく焼けたというのだ。興福寺の方は消息は知れないが、北円堂、南円堂、観自在院、大乗院、五大院、伝法院などの位置はみんな火に包み込まれていた。

天平の諸仏体は、いまこの炎の中に消滅し去ろうとしている。運慶は炎を凝視していた。凝視しているのは、実は、不空羂索立像や四天王立像とその足下の鬼形や、八天像、十大弟子像、十一面観音像などの素描であった。

運慶は、その焼失を不思議に惜しいとは思わなかった。惜しいと思うのは、尋常の観念だと考えた。いつでも見られる眼前の具象が残ることは、かえって邪魔なのだ。それが心のなかに、いわば形而上に結像することで、精神は満たされ、発想は自由となる。運慶はそんな身勝手なことを考えて、燃え狂う火を群衆と共に、眺めていた。すると、横でしきりと炎に向って合掌して歎く者がいる。彼は口の中で、

「恐ろしやな。天竺、震旦にもこれほどまでの法難はあるまい」

と呟いては、泣きながら経を誦している。

運慶はその男の顔を見た。それが父の康慶の弟子の、快慶であった。

運慶は忽ちこの男を軽蔑した。これは畢竟、尋常な人間なのである。彼は鑿を振う彫技をよくする。しかし、世俗な、といって当らなければ、普通の悲しみしか彼には無いらしい。天平の諸仏像が焼けてもちっとも惜しくない、いや、心のどこかではそれを希っているような冷酷な精神をもっているおれの方が、こいつより少くとも芸術の天分は一枚も二枚も上手だと彼は自負を感じた。爾来、このときの感想が、快慶に対して、運慶は抜け切れなかった。

南都炎上のあとは惨憺たるものであった。東大、興福の二寺は殆ど全滅である。堂塔、諸院、諸房、諸舎四十数宇を焼失し、残る所は、羂索堂、禅定院と近辺の小屋少々、新薬師寺西辺の小屋が少しばかりであった。

康慶は落胆して、自失した。

「われらの仕事もこれで終りであろう」

と嘆く。興福寺をたよって仏所を構えていた彼にとっては、生活を失うことにもなろう。

然し、中央の政局は変動していた。平氏が転落して、頼朝が鎌倉に幕府を開いた。二寺が炎上して四年後であった。

この新しい支配者は、鎌倉に腰を据えて、決して入京しようとはしなかった。その代り東大寺と興福寺の復興には恐ろしく力を入れてきた。

その計算がどこから出たか推察するのは容易である。頼朝は鎌倉から遠い京畿の人心を宗教を楯に収めようと考えたのだ。彼は信仰の保護者になればよいのである。敵が破壊したあとだから効果は困難でなかった。要するに彼は二寺再建の願主になることで、中央の保持を狙ったのだ。

新しい空気の流れるのが感じられた。いまの様式を破っ

ても、この願主はきっと気に入るであろう。すでにどうにも動きのとれなくなったところに来ている定朝以来の様式である。観念も鑿も釘づけになって衰弱するばかりなのだ。

「今度は、やれる」

運慶は、天平仏の素描を幸福そうに心に浮べた。野心が若々しい表情で充実してきた。——今、運慶が眼を瞑って想い出しても、軽い昂りを覚えるくらいである。

4

運慶は、それからそれへと、沢山な自分の造仏の歴史を思い泛べた。まず、伊豆韮山の願成院の不動明王、毘沙門天の二像である。この寺は北条時政が奥州征伐の戦勝を、祈願するために建立した寺だ。この制作で運慶ははじめて鎌倉にその存在を識られた。

勿論、仏師運慶の名は早く知られていたが、そのころは院尊、明円の二大家が居る。その光のために、運慶はもとより康慶も影が薄れていた。院尊、明円の二派は、定朝以来の典雅な伝統を墨守している正統である。いや、系譜の上では康慶が定朝の直系なのだが、その芸風は傍系の彼らがかえって直系であった。芸術は系譜にはよらない。

北条時政が何故運慶を名指したか、実際の理由は彼にもよく分らない。恐らく院尊も明円も、今まで平氏の発願による造仏に多く携ってきたから、ここらで運慶に一つ仕事をさせてみようとの議が起ったのではあるまいか。その証拠に、本尊は頼まずに、脇侍の二天だけを註文してきた。

この註文の仕方は運慶にとって仕合せな結果となった。何故かというと、彼の作風は動きの無い本尊仏よりも、動きのある忿怒相の荒々しい彫像に似合うのだ。それを眺めるのが、力で政治を闘い取った鎌倉武士なのである。運慶が設定した動勢に、新興の実力者は理解よりも精神の融合が先にきた。——このときのことは、後で運慶が大へんな政略家であったという悪評を仏師仲間から得た。

それは鎌倉幕府が、次々と康慶と運慶一門を造仏のことに起用したからであろう。時には明円から烈しい抗議が出たくらいであった。

運慶は、そのころの自分の作品を振りかえることができる。父の康慶と共に造った興福寺南円堂の不空羂索観音と四天王、法相宗六祖像、東大寺脇侍の虚空蔵菩薩像、神護寺講堂の仏像、京都東寺の仁王と二天像——それらが、今にありありと眼底に遺る。いずれも定朝様式の柔和な、優雅さはどこにも無かった。天平仏の素描の上に、自己の創意を積み上げたのだ。

その新鮮さが喝采を得た。政治機構は武家のものに変り、貴族は転落した。運慶の芸術はその思想に寸分の隙もなく呼吸を合せたことになる。

東大寺と興福寺の復興は政治の援助でどんどん捗った。運慶に場が与えられたのは自然の成行きである。一度、迎えられた芸風は一門の作風の方向を決定する。康慶も定慶

も快慶も湛慶も、運慶の指向に足を合せた。

院尊と明円は、蓮華王院の丈六阿弥陀像や興福寺金堂の諸仏を造って、依然として老大家の働きを示しはしたが、運慶の眼からすれば、歯牙にかけるにも足りない。彼らの固定化した様式には衰微の影が濃いだけである。

運慶は、つまりはこの固定化した観念の遺物様式に反逆したと自負している。おとなしいだけで躍動のない線、約束を守って生命の無い彫法、死人のような面相や姿勢にである。その前に拝跪する人間とは、間に何の繋りも無い。

運慶は仏像を生けるがままに具象化しようとした。玉眼に水晶を嵌め込む技法は、その現実感を一層効果的にする。抽象には何かがあるかも知れないが、それを感じ取るまでには時間と忍耐を要する。写実は瞬時の躊躇なく直截に訴える。それが見事な出来であればあるほど、素朴な感嘆を与える。作家の精神が、民衆の距離のない感動に融け合うのだ。もともと信仰の本質は感動ではないか。

こんなことを考えて、運慶は改めて、その頃の快慶を振り返ってみた。当時の快慶は彼の意識に疾うに上っているほどの大作家であった。この意識というのは競争相手としての意味なのだ。

運慶が仕事をすすめているように、快慶も頗る仕事をしていた。播磨浄土寺阿弥陀三尊像、東大寺大仏殿観音菩薩像、滋賀月福院釈迦如来、京都遣迎院釈迦阿弥陀二尊像、高野山金剛峯寺孔雀明王像、東大寺僧形八幡神像、文殊院文殊五尊像、伊賀新大仏寺本尊像など、数えてみれば仕事は運慶より多いくらいにしている。

運慶は、この父の弟子を殆ど自分に近い才能の持主だと思っていた。しかし彼は快慶を一歩の距離に置いて見ている。それは自分が彼の師匠の伜であり、今や一門の統率者であるという意識からではない。また、快慶が善良で、何かと謙遜な態度に出ているからでもない。

快慶の仕事を見ていると、写実に走りながら、どこか弱弱しい一点がある。表現は巧妙であるが、重量感が足りない。すさまじい迫力が感じられないのである。

それはどこからくるか。快慶の作品には写実の中に、まだ定朝様の様式が未練気に残っているのだ。あの柔和な、弱い線が黄昏のように尾をひいている。——

それは多分、快慶の性格から来るのであろう。新しい作風に向いながらも、まだ古い様式をふっ切れずにいる彼の性根は、奈良炎上の夜、二寺の堂舎の炎に向って歔泣しながら経を誦した善良さに通うのである。運慶は、同じ場所に立って炎上を見物しながら、古仏の焼けるのを心のどこかで期待したではないか。芸術家としての根性は、おのれの方が一枚うわ手だとあのとき快慶を軽蔑した。現在、一歩の距離で彼を見ているというのは、彼の彫像の上に低迷する優柔さを思い合せて、結局はその蔑視なのである。

すると、その快慶の作風を好んでひいきにする男があった。東大寺復興の事業をなし遂げた、大勧進重源である。

運慶は、衾の中で眼を薄く閉じながら、入寂して今は亡い重源の老いた顔を思い出す。

5

重源がなぜ快慶を好んだか、その理由ははじめ定かでなかった。

そのうち、重源の口から、運慶の作品について、こういう言葉が洩れたと伝わった。

「運慶の造った仏像は、あんまり人間臭くて感心しない。仏像は尊厳さが第一だ。写実も結構だが、ああ仏放れがしていては、仏という感じに遠くなる」

重源は、入宋三度に及んだ知識僧である。その人がそんな批評をした。

運慶はそれを耳にしたとき、思わぬ弱点を衝かれたと思った。が、作家は批評家に弱点を指摘されても容易に承服しない。それが急所をついていればいるほど反抗する。運慶は狼狽を感じながらも、

「何、重源なんかにおれの芸術が分るものか」

と思った。

それなら定朝様式を守ってよいのか。あの死物のような造形、衰弱している様式、石にも等しい生命のない彫像、どこに魅力があろう。それにおれは反逆したのだ。おれの造った仏像はみんな生きている。躍動がある。緊張と迫力がある。それが観るものに感動を与えている筈だ。みんなその新鮮さと充実感に感嘆している。重源が小賢しいことを云って、何を知ろうと思った。

だが、この反駁には矛盾が潜んでいた。

それは重源が快慶を贔屓にする理由を、運慶が理解する心理にである。快慶の造像に纏っている定朝様の名残りの優雅な線に、重源は心を惹かれていると分った。その部分に、重源は仏の尊厳を見出したのであろう。そうだ、と解った。——定朝様の部分に重源が惹かれている訳が解るところに、運慶の撞着があった。運慶は定朝を破壊したが、仏像の神秘まで破壊しなかったろうか。仏像をあんまり人間の写実に近づけて、そこに想像の余地まで侵さなかったか。——

運慶は、快慶に或る嫉みと軽蔑を感じた。

嫉みは、快慶が重源の殊遇をうけていることではない。また、その眷顧の下に、種々な造像の仕事を与えられていることでもない。或は、快慶が重源に私淑して、安阿弥陀仏と号したほどの両者の親密さに向ってでもない。つまり、快慶が動的な、写実を志しながらも、そのような静寂を残すところに嫉みを覚えたのである。

軽蔑はいわばその裏返しである。動と静の両方を快慶が同居させている妥協性に彼は軽侮したのだ。そのことは、快慶が、重源の持ち帰った宋の仏像の様式を無批判に受け入れたときに一層募ったのである。

ところが、重源の運慶に対する批評が世間に洩れたとみ

え、今まで絶讃されていた彼の作品について、一部でいろいろ云う者が出てきた。

「運慶の仏像は人間臭い。あれでは拝む気持になれない」

というのである。世の中の批評家というものは、誰かの云ったことを口真似して、同じようなことを云うものらしい。運慶は腹が立った。

建仁三年には、竣工した東大寺南門に入れる金剛力士像を運慶は快慶と一体ずつ受けもって仕事することになった。二丈八尺の巨大な寄木作りである。

これは「阿・吽」の一対の形像であるから、対照に統一がなければならない。運慶は吽形像をうけもつことにし、阿形像を造る快慶に作風の歩調を合せるよう打ち合せた。打合せというよりも、彼の態度は云い渡したというに近かった。康慶はすでに亡くなり、運慶が一門の統率者として支配の地位に立っていた。年齢も、もう六十近いのである。

快慶は、肚ではどう考えているか知らないが、とも角、師匠の子として、また一門の当主として運慶に従順であった。それだけの礼儀をもっている男であった。彼は素直に運慶の指示にうなずいた。

何ぶん前代未聞の巨像である。技術的にいうなら、頭から胴、足までの中心材には何本かの角材をたばねて用い、張り出した腰や裳裾には別の矧木をつけ、腕は屈節のかわる毎に材を別にした。そのほか、いろいろな場所に矧木や埋木がある。寄木造りといっても、こんなことは今までやったことがなかった。

運慶は雛型を造るときに、この造像に思い切った誇張を試みた。肉体の隆起、筋肉の誇張、裳裾の翻りにも、緊張感と重圧感を盛り上げた。彼の会心の試みであった。だから七月の末から十月の初めにかけての制作は、小仏師十数人を指揮して、精力の全部をこの仕事にかけた。

だが、快慶の阿形像を見て、運慶は驚嘆した。よくもこれだけおれに合せたと思った。それから彼の才能にも今さらながら愕いた。そこには快慶が今まで未練気に持ちつづけてきた迷うような静寂はどこにもない。歪形に近い写実の誇張は運慶に逼っていた。運慶はこの異常な職人に圧迫さえ感じた。

南大門の金剛力士の二像は、果して喝采をうけた。それは運慶が期待した通りなのだ。作品は最も適した対象を得て、一番の精彩を放つ。殊に写実の世界ではそうなのだ。

ところが感嘆の瞳を輝かして見ている群衆の中で、嘲るようにこう云って群から離れる者があった。

「あの誇張は少々嫌味だな。運慶の臭味がそのまま拡大されているではないか。第一、あんな人体ってないよ。骨も筋肉も間違っている。いくら誇張だといっても、あれはひどいよ」

「そうだ」

とそのあとからついて行く者が相槌を打った。

「演技だけでごまかしている作品だ。それに、あれは、ど

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com